

3 年間基本計画

(1) 研修会主題と主題に迫るための視点

令和2年度研修会主題

学んだことを社会や生活に生かす学習過程のあり方

令和2年度研修会主題に迫るための視点

視点① 子どもの予想と見通しを大切にした単元づくり

視点② 本気の学習問題を追究し、社会的事象の意味等に迫る授業づくり

(2) 主題設定の理由

【昨年度までの研究から】

横浜市小学校社会科研究会では、「学んだことを社会や生活に生かす学習過程のあり方」を研修会主題とし、主題に迫る視点を次の2つに設定して研究を進めてきた。

令和元年度研修会主題に迫るための視点

視点① 子どもの予想と見通しから創り上げる学習計画をもとにした単元づくり

視点② 本気の学習問題を追究し、社会的事象の意味に迫る授業づくり

<研修会を通して吟味してきた点>

- ・「単元を見通す学習問題」の解決に向けて、子どもの予想や見通しをもとに学習計画を立てたことが、その後の子どもの学習にどう働いているか。
- ・子どもが、何がどのように分かったのかふり返るためには、いつ、どのような視点でふり返る場面を設定したらよいか。
- ・「本気の学習問題」や本時目標が、社会的事象の意味に迫るものになっていたか。
- ・社会的事象の意味に迫るための手立て（資料の精選、資料提示のタイミング、板書、問い合わせ、発問など）は適切であったか。
- ・1時間の授業の中で概念的知識を獲得しようとしている姿とは、どのような子どもの言葉で表現されているのか。

この結果、次のような成果と課題が見られた。

【成果】

視点①より

- 「単元を見通す学習問題」を事例学習の導入場面で成立させることで、人々の営みに迫りやすくなり、子どもの追究意欲の高まりが見られた。※単元が事例学習に終始しないよう、俯瞰して学習する場面も作り出すこと。
- 子どもと学習計画を立てたことで、問題の解決に向けて何をどのように調べたらよいか見通しがもて、自ら聞き取り調査をしたり、資料を集めたりする姿が見られた。
- 学習計画を立てる場面を見学調査前に設定することで、子どもが視点をもって見学調査に臨むことができた。
- 学習計画を毎時間の学習問題の形で立てるのか、調べる視点を明確にする形で立てるのか、といった形式については、学年や単元に応じて教師が柔軟に取り扱うことで、学習の見通しと学習活動とが無理なくつながった。
- 子どもが学習計画をふり返る必然性が生まれた時に、それまでの学習をふり返ることで、問題意識をさらに深めたり、それまで見えていなかった問題を見出したりする姿が見られた。
- 単元の終末で単元全体の学びについてふり返る場面を設定することで、自らの学びや自分と教材とのかかわりについて表現する子どもの姿をみとることができた。

視点②より

- 具体的な人々の営みを取り上げた「本気の学習問題」を成立させて話し合うことで、子どもが「その人」の立場に身を置いて考えることができた。
- 本時までの子どものみとりに基づいて、子どもがどう予想し、どのように思考するか考えて資料を精選することで、本時目標に近づく子どもの姿が見られた。
- 本時だけでなく、前時からのつながりの中で資料提示のタイミングを図ることで、子どもたちの必要感の中で教師が資料提示をすることができた。
- 教師が子どもの言葉を想定しておき、タイミングよく問い合わせことで、子どもが話題を焦点化して考えたり、具体的に表現したりすることができた。
- 具体的でない言葉が具体的な子どもの言葉で語られる場面で、社会的事象の意味に迫る姿が見られた。そのため抽象度の高い言葉を問い合わせることは有効であった。

【課題】

視点①より

- 「単元を見通す学習問題」が子どもにとっての学習問題になっているかどうか、より意識していく必要があった。学習内容や学び方も踏まえつつ、子どもが調べたいと思える導入の工夫が求められると考える。
- 学習計画を含めた学び方について、自らの学習を振り返り、次の学習（単元）に生かしていくことについては、検証することが難しかった。学び方について子どもが自覚できる機会を保証し、積み重ねていく必要があると考える。

視点②より

- 「本気の学習問題」が学級の問題意識として共通してもつことができていたか考えていく必要があった。「本気の学習問題」の成立過程において、学習問題の言葉の捉えに差が無いようにしていく必要があると考える。
- 子ども同士の学び合いをつくりながら、学習の本質に迫るために、どこまで教師が指導性を発揮するか課題が見られた。社会的に事象の意味に迫る子どもの姿とは、子どものどんな言葉に表れてくるのかを具体的にしていき、そのための教師の出を精選していく必要があると考える。

(3) 今年度の主題とそのとらえ

市社研ではこれまで、子どもたちが社会的事象をじっくり見つめ、そこから生まれる問題意識をもとに、学習を展開することを大切にしてきた。その学習過程では、子どもたちが自ら調べたり、話し合ったりしながら、自分の考えを広めたり、深めたりし、社会的事象がもつ意味や特色をとらえていくことをねらってきた。このことは今後の研究においても継承し、大切にしていく。

さらに昨年度より、子どもが「**単元を見通す学習問題**」をもとに予想した子どもの問題意識が学習計画につながっているのか、教師主導になってはいないか、また「**本気の学習問題**」を追究する際に、子どもが何を調べ、何を考え、どのような言葉や文章で表現していくのかを教師がとらえ、そこに迫るためににはどのような手立てが必要なのか研究を深めてきた。

子どもたちが主体的に学習に向かい、調べたり話し合ったりしながら追究する問題解決的な学習を積み重ね、未来に生かそうとする意欲をもつ授業を創っていくため、また今年度開催する全小社神奈川大会の研究主題、サブテーマを受け、引き続き、研修会主題を、**「学んだことを社会や生活に生かす学習過程のあり方」**と設定する。

「**学んだこと**」とは、これまで市社研が大切にしてきたように、子どもたちがもつ問題意識を中心として社会的事象の見方・考え方を働かせて追究していくその過程において育成される公民としての資質・能力の基礎を指す。具体的には、「社会生活の理解に関する知識及び社会的事象について調べまとめる技能」「社会的事象の特色や意味などを多角的に考える力、社会への関わり方を選択・判断する力、考えたことや選択・判断したことを説明したり、議論したりする力」「よりよい社会を考え主体的に問題解決しようとする態度」、そしてそれらが培われる過程で子どもが身に付けた学習方法である。

「**社会や生活に生かす**」とは、学習の中で育成される資質・能力を生かして、「～を調べると～がわかった。だから次の学習でも同じように調べよう。」と学習方法を新たな学習へとつなげたり、「○○の学習では～だったから、もしかしたら△△でも～かな。」と獲得した概念的知識を次の学習でも活用できないかと考えてみたり、自分の身の回りの出来事につながることがないかと自分たちの生活のあり方やこれから社会の発展などについて考えたりするなど、次の学習や自分たちの生活へとつなげようすることととらえる。

「**学習過程のあり方**」とは、子どもたちが主体的に学び、自分の考えを深め、学んだことを今後の学習に生かしていく学習の流れを指している。つまり、生活経験・既習事項など子どもの実態を踏まえ、それらと異なる事実と出合うことで子どもの意外性を導き出し、追究意欲が高まったところから生まれる子どもの問題意識を大切にしてつくられる「**単元を見通す学習問題**」。子どもがこれから学習に見通しをもちながら主体的に立てていく学習計画。さらにその過程で子どもが矛盾を感じる社会的事象に出会ったり、ある社会的事象に対して友達と意見が違ったりして、子どもの思考が揺さぶられることで疑問が深まり成立する「**本気の学習問題**」とその追究過程で社会的事象の意味等に迫る場面。また、必然性が高まったときに学習過程を振り返ることで自らの学習を調整する場面、単元の終末としての、学びを社会生活に活かしたり、選択・判断したりする場面である。

以上の研修会主題のとらえから、どんな社会的事象をどのように出合わせるのか、どの視点に目を向けるか、どこで立ち止まりどこで子どもの考えを広げ、深めていくかなど、市社研で大切にしてき

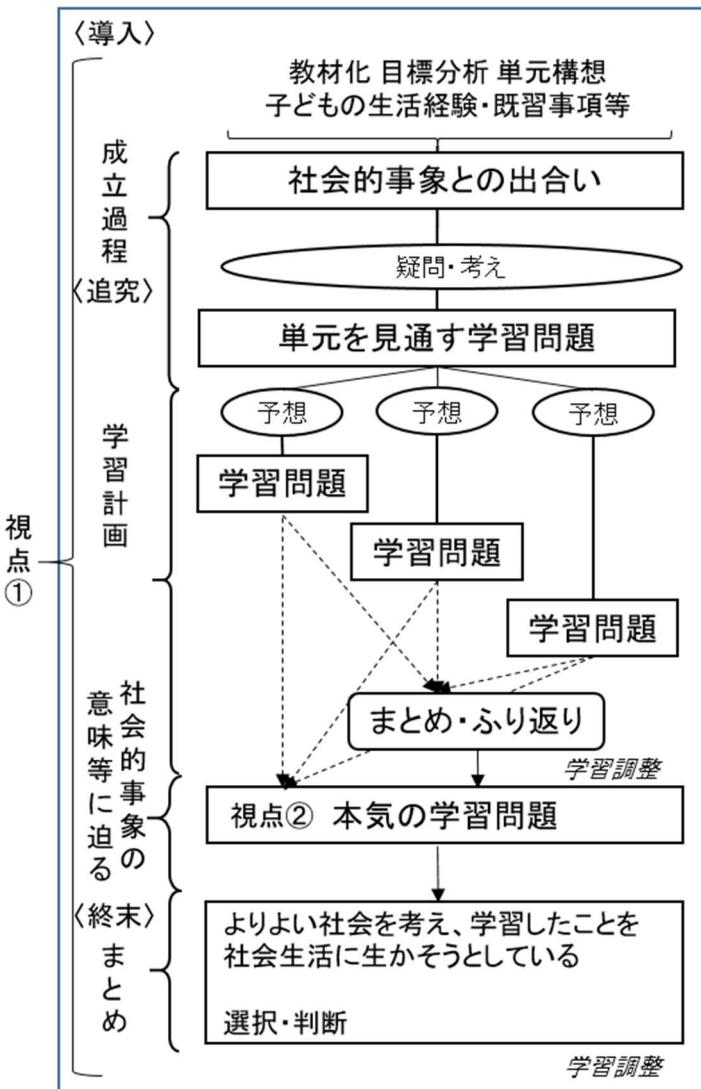
た問題解決的な学習を継承し、子どもの学びを深めるために、2つの視点を設けて研究していく。

(4) 研修会主題に迫るための視点

視点① 子どもの予想と見通しを大切にした単元づくり

視点①では「単元の導入から、単元を見通す学習問題の設定、本気の学習問題、そして単元の終末」の過程における、子どもの問題意識、思考の流れを大切にした「単元づくり」の視点で研究を進める。

- ・単元の導入段階での、指導要領を十分に吟味し、また子どもの生活経験や既習事項などを考慮した、教材の選定、目標分析、単元構想
 - ・社会的事象と出会い、子どもの問題意識を大切にした「単元を見通す学習問題」の成立過程
 - ・単元を見通す学習問題について、解決に至る学習の計画
 - ・学習を進めていく中で、自ら学習過程を見直す場面
 - ・単元の終末で、内容に応じて学んだことを生かして、自分たちのかかわり方などを選択・判断する場面
 - ・単元の終末で、内容に応じてよりよい社会を考え、学習したことを社会生活に生かそうとする場面
- これらの視点をもとに、単元を見通す学習問題についての子どもの予想と見通しを生かした学習計画から社会的事象の意味等に迫る本気の学習問題の追究、単元の終末へとつながる学習過程を研究していくものとして視点①を設定する。



視点② 本気の学習問題を追究し、社会的事象の意味等に迫る授業づくり

視点②は学習計画の追究過程で、矛盾を感じたり、意見の相違が生まれたりする社会的事象に出合う場面を設定し、その社会的事象の意味等に迫る「本気の学習問題」が生まれるまでの過程とその問題を追究する授業場面の視点で研究を進める。

- ・「本気の学習問題」がどのように生まれるのか
- ・「本気の学習問題」を追究することで捉えさせたい社会的事象の意味等についての吟味
- ・教師の提示資料の選定や、提示のタイミング
- ・教師の問い合わせや子どもの発言や表現に対する価値づけ
- ・追究過程で、社会的事象についての自分の考えを表現していくことを通して、どのように概念が形成されるのか
- ・本時の中での概念的知識の表出と、教師による子どものみとり

これらの視点をもとに、社会的事象の意味等に迫る授業づくりにおける「本気の学習問題」や教師の役割について研究していくものとして、視点②を設定する。

(5) 研究・研修活動

- ① 毎月1回定例研修会を行う。（内容は学年別研修会や講演会等）
- ② 研究内容と活動の方向性については、研究推進部や支部長会、幹事会で検討し、研究内容の具現化を図る。
- ③ 幹事による研修を充実し、幹事としての力量を高め、本部・支部の研修内容を高める。
- ④ 研究発表大会、支部長会、幹事研修会、神奈川県小学校教育研究会社会科部会・学年別研修会等を通して、研究の交流、情報交換の場を充実し、研究の活性化を図る。
- ⑤ 研究主題に関する考え方の深化発展を目指し、各種講演会を開催し実践に役立つようにする。

(6) 研究組織及び活動

会の運営のために、次に示す部会を設置したり、活動を行ったりする。

① 学年別研修会

3年、4年、5年、6年の4部会を設置する。全ての会員で構成し、部長・副部長をおく。授業実践を通して、研究主題・研究内容等についての事例研究並びに理論的研究を進める。

② 支部長会

各支部の支部長及び役員で構成する。研究計画、諸行事、研修会の運営が円滑にできるよう調整を図るとともに、本部と支部、及び支部相互の交流と調整を進める。

③ 幹事会・幹事研修会

市幹事全員と役員で構成する。研究計画の審議や決定を行うとともに、幹事の力量を高める研修を行う。また本市研究会の推進役としての自覚をもって、研究活動の系統立った発展に努める。

④ 研究推進部

研究推進部長、副部長、学年別研修会の部長・副部長及び役員で構成する。研究活動の推進調整、並びに理論構築を図る。研究の成果や課題を明確にし、系統立てた研究発展に資する。

また、定例の研修会、研究発表大会、神奈川県小学校教育研究会社会科部会主催の学年別研修会に向け、会員が積極的及び、充実した実践提案ができるように支援するとともに、会員相互の交流を通して、社会科研究の深化を図ることができるよう努める。

⑤ 学年運営部

学年運営部長、学年別の部長・副部長、市幹事及び役員で構成する。学年別研修会の円滑な運営と研修会の充実を担う。研修会の司会・記録を担当し、研修会の運営をする。また、アンケートを作成、集約し、研修会の振り返りに生かすとともに、研修会の内容を「研修会記録」にまとめ、会員に発信し、周知する。また各実践提案をまとめた「研究集録」を作成し、販売する。

⑥ 情報部

市幹事と役員で構成する。研究主題に基づく研修活動から活動方針・内容に関する理論的示唆を受け、実践研究の充実のために役立つ情報を広く提供していく。「観察研修会」「講演会」「研究発表大会」のプロジェクトを構成し、部長・プロジェクトリーダーが中心となり、担当役員と相談しながら、主体的かつ創造的な活動を行うよう努める。また、会報を発行し、社会科教育に関する情報や研究の成果・内容などを会員および各学校に広める。

⑦ 社会科授業づくり部

市幹事及び会員、また会員以外の教員で構成する。社会科研究に新たな志をもって臨み、互いの実践について話し合ったり、これまでの優れた実践記録を読み合ったりすることを通して、授業実践力を高めるとともに、交流を図ることができるようする。

⑧ 研究発表大会

研究発表大会は、市社研の研究主題や研究内容をうけた個人テーマを設定した上で実践に取り組み、その実践をもとに市社研の研究を検証し、会員に対して広く発表する場である。

発表者は発表担当区の代表者であるが、実践については、区をあげて取り組むこととする。

⑨ 特別委員会「社会科指導計画事例集作成委員会」

新指導要領実施に向け、その趣旨を共有するとともに、横浜らしい指導計画のあり方を研究し、事例集を作成する。

⑩ 役員会

横浜市小学校社会科研究会の研究活動全体を総括し、各会・部の調整を図る。

(7) 研究の進め方

① 学年部

- ア 学年部では学年部長を中心に、研修会主題の研究をしていくために、研修会主題に迫るために視点をもとに、各学年の特性をふまえた学年で大切にしたい手立てを示す。
- イ 研修会で研修会主題に迫るために視点を用いた授業実践を提案してもらい討議することによって研修会主題についての研究を進める。
- ウ 授業提案の1回目の事前研に関しては、部長・副部長を中心に、該当単元の実践例や各学校の指導計画例を持ち寄り、参考資料とする。
- エ 学年部の運営は学年運営部と連携して行う。

② 推進部

- ア 推進部は推進部長を中心として研修会主題に迫るために視点をもとに研修会を通して吟味することを設定する。
- イ 各学年部の設定する「学年で大切にしたい手立て」を整合性のあるものにする。

③ 学年運営部

- ア 学年別研修会の司会や記録、研修会の振り返りアンケートの作成と集約、速報の発行を担当し、研修会を円滑に運営する。
- イ 学年別研修会の運営について、学年部と連携して行う。
- ウ 研修会の内容を知らせるために、「研修会記録」にまとめ、ホームページにも掲載することで、いつでも誰もが見ることができるようにしておく。掲載内容は提案の概要、討議内容、講師の先生の指導内容を中心とする。
- エ 年間の実践を紹介する研究集録を作成し、販売する。

④ 実践者

- ア 実践提案・授業提案には会員の方々が中心となってあたる。
- イ 授業実践、実践提案者は、研修会主題に迫るために視点をもとに手立てを考え、提案の際に位置付けるようにする。
- ウ 実践提案については次のことに留意する。
 - ・ 子どもの姿が分かるよう、提案の仕方を工夫する。
 - ・ 1時間の授業記録、単元における子どもの考え方の変化等を掲載し、具体的な子どもの姿が分かるようにする。
 - ・ 個人情報に関しては十分配慮をする。
- エ 県小社の提案に関しても各部会での実践提案と同様の扱いとする。
- オ 研修会活動には、先輩の先生方を講師として招聘し、指導を仰ぐようにする。

⑤ 配慮事項

- ア 研修会での話合いは、具体的な事例をもとに進める。各学年部で設定した手立てをもとに、研修会主題に沿った話合いができるようにする。
- イ 地域的な偏りはなるべく避けるように授業者を決定する。また、部会だけでなく各支部においても運営、内容面で十分な協力体制がとれるようにする。(実践提案も同様とする)

(8) 会員及び会費

- ① 本市小学校教員を対象として年度始めに支部を通して募集する。
- ② 年間1500円(令和2年度は1000円)とし、年度始めに支部を通して納入する。